第 2 号　2026年(令和８年)９月10日(木曜日)　　発行　大野市生涯学習・文化財保護課

2026 秋号 季刊 文化財新聞

知れば知るほど　大野がみえる

結の故郷 越前おおの

大野市の文化財 Facebook

越前朝倉氏と大野

「朝倉氏」と聞くと、福井市の一乗谷を思い起こす方が多いと思います。しかし、大野市も朝倉氏と深い関りがあります。

●越前朝倉氏の誕生

１４６７年に応仁の乱が起こると、朝倉孝景(朝倉初代)はかつての主君・斯波氏と敵対しました。孝景は各地で勝利し、１４７５年の土橋城(日吉町)での戦いに勝利したことで、朝倉氏による越前支配が決定しました。

※その後も残党による抵抗がありましたが、１４８１年の小山城(北御門・森政領家・猪島)での戦いで終結しました。

●越前朝倉氏による慰霊

朝倉氏と斯波氏との戦いでは多くの兵が命を落としました。孝景の弟・光玖は戦死者を弔うために敵方の大将であった二宮氏の館跡(日吉町)に寺院(現在の蓮光寺)を建てました。また、小山城の近くに経塚をつくって菩提を弔いました。

こうした行動は、「侵略者」としてのイメージを和らげるなど、以後の支配をスムーズに行うために役立ったと思われます。

●越前朝倉氏の大野郡支配

朝倉氏は越前国内の主要な地に配置した奉行や代官に指示を出して、直接支配をしていました。

一方で、大野郡と敦賀郡には「郡司」が配置されました。郡司は一乗谷の朝倉氏の指示がなくても、自分の判断で行動することができました。朝倉氏はこの2つの地を重要視していたようです。

●越前朝倉氏の終わり

１５７３年、織田信長との戦いに負けた朝倉義景(朝倉5代)は再起を図るために大野郡へ移りました。

大野郡は従兄弟の景鏡が郡司を務めていました。また、平泉寺(勝山市)の応援も期待していました。しかし、景鏡も平泉寺も義景を裏切ってしまいます。信長軍に宿所としていた六坊賢松寺(不明)を囲まれたため、義景は自分で腹を切り、火を放って自害しました。

こうして、大野郡平定から始まった朝倉氏による越前支配は、同じく大野郡で終わったのでした。

(田中)

大野市の恐竜たち

●大野市初の恐竜化石

大野市で初となる恐竜化石の発見は、１９９６年まで遡ります。それは大野市下半原に分布する手取層群伊月層(約1億２８８０万年前：前期白亜紀)から発見された長さ約1㎝の歯化石でした。この歯は、断面がアルファベットのDの形で、肉食恐竜の特徴である鋸歯と呼ばれるギザギザが2列に並んでいます。これらの特徴は、ティラノサウルス類の上顎の前に並ぶ歯に見られるものです。その後、この歯化石は、日本産ティラノサウルス類として1999年に世界的に発表され、当時、世界最古級のティラノサウルス類化石として注目されました。

1996年に大野市下半原で発見されたティラノサウルス類の歯化石

●ティラノサウルス類とは

１９０５年、アメリカ・モンタナ州で発見された巨大な獣脚類恐竜が「ティラノサウルス・レックス」(全長約13ｍ)と命名されました。本種は、白亜紀末期(約６６００万年前)の最大・最強の肉食恐竜として有名です。ティラノサウルス類は、これまでに北アメリカやアジア、ヨーロッパで発見されており、現在までに30種以上が知られています。

大野市のティラノサウルス類は、どんな恐竜だったのでしょうか。大野市産ティラノサウルス類の歯は、２００４年に中国遼寧省の約1億３０００万年前の地層から発見されたティラノサウルス類のディロング(全長約2ｍ)の歯と共通した特徴

をもっています。このことから、前期白亜紀の大野市には、身体が大きく進化する前のディロングのような小型の種類が生息していたと考えられています。

●大野市の恐竜研究への期待

福井県ではこれまでに数多くの恐竜化石が発掘されていますが、現在までにティラノサウルス類の化石が発見されているのは大野市下半原だけです。日本産ティラノサウルス類の化石は、大野市の他に、北海道や岩手県、福島県、石川県、兵庫県、長崎県、熊本県に分布する白亜紀の地層から発見されています。その中で大野市と石川県白山市が並んで日本最古のものとされています。つまり、大野市は、日本のティラノサウルス類のルーツやその起源を明らかにする可能性を秘めた地域であり、更なる化石の発見が期待されているのです。（酒井）

大野市のティラノサウルス類のイメージ［©山本 匠］

美味しいものを食べる

私たちは古くから食事を楽しむために、様々な調理方法を考え、様々な食事ルールを定め、様々な道具をつくってきました。こうした「食事に関する工夫」を「食文化」といい、時代や地域の特徴が現れます。

●大野の伝統食

例えば大野市には、夏に焼鯖を食べる風習があり、令和3年度に「半夏生さばの食文化」として文化庁100年フードに認定されました。江戸時代に始まった行事で、山間に位置する大野藩にとって海の魚を食べることは、単に「満腹になる」以上に、特別な食事でした。田植えが終わった頃に、疲れを癒やし、迫る猛暑を乗り越えられるように元気を蓄えようとしたと考えられます。幕末には大野藩の上級藩士が大量の鯖を発注していますので、農家以外にもひろく受け入れられたようで、現在に受け継がれています。

大野の夏の風物詩「半夏生さば」

また、川合区には、正月の朝に道場に集まって、住民のみんなが同じ雑煮を食べる「お箸始め」（おおの遺産）が行われています。1年で1番最初に食べる、1番大切な食事を、地域のみんなで共にすることで、地域の一員としての自覚が芽ばえたようです。

様々な形状の「とっくり」
所蔵：大野市民俗資料館

土布子区は江戸時代、大きな洪水に襲われ、濁流が押し寄せましたが、祠に流木が引っかかったおかげで難を逃れたといいます。以来、土布子区では「伊勢講」（おおの遺産）を開き、味噌を濁流に、大根を流木に見立て、これを食べることで水害を封じようとしました。

●食にまつわる道具

こうした食事を支えてきた道具にも、様々な工夫があります。9月8日（火）から、大野市役所市民ホールで開催する「昭和100年記念展示 昭和の暮らし その2 食べる」で、民俗資料館（休館中）が収蔵する民俗資料のうち、「食」に関する資料の一部を展示します。例えば「酒とっくり」と「油とっくり」は、同じ「とっくり」でも形状が異なります。ぜひ展示をご覧いただき、その違いに込めた先人たちの工夫について、思いを馳せてみてください。（田中）

こどもしんぶん創刊

6月の創刊につづき、第2号の発刊です。

創刊について報道機関で取り上げていただいたこともあり、多くの反響をいただきました。これからも、大野市の文化財の魅力について、わかりやすく紹介していきます。

さて、今季号から、小学生を想定した季刊「こども文化財しんぶん」を創刊します。取り上げる記事の内容は同じですが、言葉遣いをもっと簡単にして、わかりやすくなるように工夫をします。「文化財」というと、「学校」「勉強」「テスト」と結びついてしまい、敬遠してしまう子どもたちも少なくありませんが、実は身近なものなんだよってことを伝えていきたいです。

両方の文化財新聞が、大野市を知り、大野市をもっと好きになるきっかけとなれば幸いです。

イベント情報

昭和100年記念展示「昭和の暮らし　その2　食べる」の開催

期間：2026年9月8日（火）～10月18日（日）

場所：大野市役所　市民ホール「特別ギャラリー」

令和8年は、昭和元年から起算して満100年を迎えます。100年を記念した展示第2弾は「食べる」をテーマに、昭和に使われていた食に関する民俗資料を展示します。

恐竜化石発見30周年記念企画展「九頭竜の恐竜たち」の開催

期間：2026年7月18日（土）～11月8日（日）

場所：くずりゅう化石ラボ　ガ・オーノ

1996年に大野市で初となる恐竜の歯化石が発見され、近年では大腿骨化石が発見されています。恐竜化石の発見から30周年を迎えるのを記念して、本市における恐竜研究の成果について紹介します。